

二〇二二年度

群馬県立女子大学 文学部 文化情報学科

学校推薦型選抜試験問題

小論文

試験時間は、九十分です。中途退室は認めません。途中で気分が悪くなった場合は、黙って手を上げてください。

問題用紙は三枚です。他に下書き用の白紙が二枚入っています。

解答用紙は二枚あります。それぞれが配られたら、指示に従って解答用紙の所定の欄に受験番号、氏名を記入してください。

試験開始の合図があるまで表紙をめくって問題を見てはいけません。

解答用紙の所定の欄に受験番号、氏名を記入し終えたら、静かに試験の開始を待ってください。

以下の文章を読んで、次の問いに答えなさい。

【問い】

傍線部『車内の読書』の孤独が、今流行りつつあるスマートフォンやiPadなどのメディアによって、再び新たな『黙読』として再生しつつある」とはどのようなことか、文章の内容をまとめた上で、あなた自身は「こうした変化をどう考えるか説明しなさい(1000字以内)。

一時期はソニーの代名詞ともなった「ウォークマン」が発売されたのは、約三〇年前の一九七九年である。イヤホン(ヘッドホンをふくむ)とともに携帯されたウォークマンは、音で満たされた個室を一九八〇年代の街頭の雑踏のなかへと延長した、最初の発明であった。

ウォークマンについては、細川周平「一九八七」やイギリスの文化研究者たち「Du Gay 1997=二〇〇〇」などの分析があるので、あまり深入りはしない。しかし、細川の鋭い先駆的な分析の一節を引用しておこう。

ウォークマンは既存のサウンドスケープ(出題者注1)と距離を保つ。しかしそれはその外部にあるのではない。それは都市においてその網目を穿ち、亀裂を掬う一介のゲリラとなると同時に、都市的なるものにおいて歩行を劇的にする。劇的な歩行、劇的な街路、劇的な地下鉄……

歩く人はヘッドホンに囲われた「想像の」劇場の支配人であり、看板役者であり、観客となる。彼は都市空間を劇場と化す。そのときなのだ、演劇Ⅱ劇場が世界を変えるのではなく、世界が演劇Ⅱ劇場を変えるのは。「細川周平 一九八一・一四二一―一四三、傍点原文」

ふりかえってみれば、この機器は固定電話の旧世紀のうちに、音楽聴取という隣接領域にあらわれた「ケータイ」の予言者であった。ローカルな身体をつつむ現実空間の「個室化」

の伝道者であると同時に、一九世紀の鉄道という大衆的な移動手段の中のコンパートメント(仕切られた客室)で生まれた「車内の読書」の末裔まつえいであった。

私は、歴史社会学者シベルブシュの卓越した分析を思い出す。

なぜ人びとは、鉄道でのどこか慌ただしい移動の最中に、あえて読書をするようになったのか。知識欲が突如高まったからではない。談笑の強制ともいえるべき中流社会的な社交の規範から、合理的に「逃避」するためであり、不作法と受け取られかねない自らの「視線」を、開いた書物という格好の小道具によって遮断するためである。

シベルブシュは、その行動誕生のメカニズムを次のように説明している。

一七世紀に広く利用されるようになる馬車から一九世紀の乗合馬車までの時代は、まだ移動する距離も相対的に短く、またそれを利用する階級も限られていて、乗り合わせた利用者の文化にも均質性が高かった。それゆえ、たまたま同乗した隣人との「談笑」という社交の義務も、中産階級的な知識教養の共通性や儀礼的性格のなかで、なんとか果たすことができた。ところが、人間の大量輸送を可能にした鉄道空間において、列車に設けられた客室数は増大し、列車に乗り合わせる利用者の異質性も高くなるざるをえない。乗客の他者性は高まり、コンパートメントの偶然の同乗者にどのように話しかけて共通の話題を発見し、社交の実をあげるかが困難な課題となっていく。

シベルブシュは、社会学者ジンメルのような観察を引用している。

乗合馬車、鉄道、市電は、十九世紀につくりだされるが、それ以前には人たちは、互いに話しあうことなしに、数分間ないしは数時間、互いに鼻つき合わせて見つめ合うことができ、あるいは見つめ合わねばならぬような状況にはなかった。[Schivelbusch 1977 一一九八

二・九七]

とはいうものの、黙りこくっているのは失礼である。しかも目は否応なく開いているので、相手を見ないわけにもいかない。じろじろと何もいわずに見つめるのは、さらに不作法であるのは明白で、ひよっとしたら逆に自分に災難が降りかかってくるような、危険なことにもなりかねない。

コンパートメントという閉ざされた空間での「読書」は、この不作法になりかねない自分の視線を、自らの行為によって遮断する。開いたページに視線を留まらせることで、相手を見つめないでいられる。さらには相手からの交流の話しかけをゆるやかに遠ざけるという、儀礼的な「逃避」の機能において、まことに好都合であった。新聞だけでなく、鉄道旅行用に駅で売られた軽い装丁の携帯可能な書籍も、この社交の規範が要請するコミュニケーションからの逃避に利用できる、効果的な小道具となった。黙読は、見えない個室空間を列車内につくり上げ、関係を切断する効果的な戦略だったのである。

おそらく、メディア史の研究者であれば、ウォークマンが一面では「音読」へと変換し、より正確には「黙読」から「黙聴」へと移行させて受け継いだ「車内の読書」の孤独が、今流行りつつあるスマートフォンやiPadなどのメディアによって、再び新たな「黙読」として再生しつつあると論ずるかもしれない。しかし、それはさらに詳細な観察や分析の積み重ねを必要とする別の物語であり、いつか別のところで詳しく論ずることにしよう。

佐藤健二「ケータイ化する日本語——モバイル時代の『感じる』『伝える』『考える』」(大修館書店、二〇一二年)

【出題者注】

(1) サウンドスケープ…聴覚的に捉えられる音を、視覚的に見える風景と切り離せないもの、風景と同じように環境を構成するものとする考え方。「音風景」や「音景」と訳される。ここではウォークマンを使っている人間には聞こえていない、周囲の様々な音を指している。

※本文中に挿入されていた写真・図表は出題にあたって省略した。